令和９年（2027年）茨城高等学校・茨城中学校は
創立100周年を迎えます　あと４年です

報恩感謝

発　行
茨高・茨中百周年
準備委員会
代表　　種田　誠
茨高・茨中会報発行委員会
水戸市八幡町16－１
電話　029(221)4936
茨高・茨中公式ホームページ
http://www.ibaraki-jsh.ed.jp
印刷　いばらき印刷(株)
題字　中島　儀昌

百周年記念事業のいま……１
同窓会名簿完成　大津順一郎…１
中同窓会長就任　佐々木幸一…１
第３回準備委員会報告……２
募金委員会より　……２
学習支援センター　……３
年表で見る百年（上）……３
あの時　照沼毅　……４
あの時　中山佳子　……５
本年度部活動の活況　梶克治…６
夏の大会ベスト８　野球部…７
飯村丈三郎と教育(3)　……８

百周年記念事業のいま

百周年準備委員会会長
茨城高等学校・中学校理事長
種　田　誠

百周年準備委員会発足後の関係各位のご協力に感謝いたします。この１年で、記念会報は第３号となり、また、同窓会名簿が完成し、同窓生や多くの方々の手元に届いております。

新たに、目標３億円の募金活動実行委員会も発足しました。

百周年記念会館設立に向け、土地取得・整備が順調に進み、どのような建物にするか検討の時期に来ております。是非とも県産材活用の木造建物にしたいと思います。

百周年に向けて各準備が着実に進展していることに感謝し、尚一層のご支援をお願いいたします。

https://twitter.com/iba_chu_ko

バックナンバーは学校HPの100周年記念サイトでご覧になれます

同窓会名簿の完成

百周年準備委員会副委員長
茨城高等学校同窓会長
大　津　順一郎

この度、百周年記念事業の一つとして茨城高校・中学校合冊の同窓会会員名簿が関係各位のご理解、同窓生各位のご協力のもと発刊されました。申し込みいただいた皆様は既にご覧になられた方も多いかと思います。昭和６年３月第１回卒業生から令和５年の卒業生までに我々母校から３万６千名余りの同窓生が誕生いたしました。この名簿により同窓生は、互いを再確認し合い互いをつなぐことが出来ます。また同時に八幡町で建学の精神「報恩感謝」と共に過ごした学生時代、青春時代を懐かしむことも出来ます。

創立百周年は、我々母校の歴史の中でも特に大きな節目です。同窓生も「報恩感謝」の精神の元、力を合わせ出来る限り物心両面より、ご支援、ご協力をしたいと存じます。

茨城中学校同窓会会長就任にあたって

百周年準備委員会副委員長
茨城中学校同窓会長
佐々木　幸　一

この度、10月21日に開催の大同窓会で皆様からご承認いただいて、前田真一前会長から引きついで中学校同窓会会長に就任予定の佐々木幸一です。宜しくお願いいたします。

百周年記念事業では、募金委員会の委員長としてお手伝いさせていただきます。

前回の平成19年に開催された八十周年の時に、実行委員として皆さんとお手伝いをした経験をいかして、募金活動を積極的に進めてまいります。

同窓の皆様の多大なご支援をお願いして、目標金額をいち早く達成して、創立百周年にふさわしい記念事業を、後輩の皆さんに贈りたいと思いますので、ご協力を何卒宜しくお願いいたします。

第3回準備委員会報告

日時・場所
令和５年６月21日（水）　16時より。本校応接室。

議事
１　準備委員会委員長挨拶
２　全体会
(1)　会報について
第２回準備委員会からの変更点
(2)　実行委員会会則の承認
(3)　実行委員会の人選
(4)　募金準備状況報告
３　分科会
(1)　広報委員会
ＨＰバナー
ツイッター（現Ｘ）
会報配布
大同窓会
職域同窓会
水戸市役所７月７日
教職員　水戸県警
つくば銀行
地域同窓会
笠間　茨城町　東海
那珂湊
(2)　募金委員会
募金スケジュール
役割分担の確認
(3)　建設委員会
会館敷地解体終了報告
記念会館基本コンセプト
(4)　記念誌・会報委員会
『飯村丈三郎読本』概要
会報第３号企画
昭和61年以降年表作成
資料の収集状況
(5)　式典・記念行事
記念行事の検討

会報について…以下全項目承認
(1)　会報の性格（百周年事業の広報を中心・卒業生の回想・学校の現状・校史研究他）
(2)　発行規模（現状維持）
(3)　現状は同窓会誌と別組織
(4)　題字（隷書体に変更）
(5)　校正（オンライン校正）
(6)　普及法（ＳＮＳ利用など）

実行委員会会則…承認
会報第２号２頁から３頁の内容が承認された（本校ＨＰ百周年記念サイトバックナンバーで確認）。

募金委員会より

第３回準備委員会と８月26日（土）の募金委員会の討議を踏まえ以下の趣旨が決定された。

１　募金の名称
茨城高等学校・中学校　創立百周年記念募金

２　募金の目的
創立百周年記念事業の実現
(1)　記念式典の開催
(2)　記念シンポジウムの複数回開催
(3)　記念誌・会報の発刊
(4)　グローバル教育・探究活動・ＩＣＴ教育の推進
(5)　教育環境（施設・グラウンド）の拡充
(6)　新しい教育を創出する学習支援センター（仮称）の新築

３　募金の目標額
３億円（上記事業の実現のために必要な金額）

４　募金の期間
令和５年（２０２３年）11月１日～令和10年（２０２８年）３月31日

５　申込方法
個人／１口５千円（２口以上）
法人・団体／特に決定せず

６　申し込み方法
同窓会会員には振込用紙を送付いたします（11月）。
クレジット決済も可能
詳細は振込用紙に添付される案内にてご確認ください。

７　顕彰
高額寄付の方々には寄附者銘板を作成し、新築の学習支援センター内にご芳名を残します。また、寄附者全員の芳名録を作成し、学校のホームページに掲載いたします。

８　記念品
毎年１万円以上の寄附者に百周年記念小冊子（全５巻）を贈呈いたします。小冊子の内容は毎年変わります。計５万円以上の寄附者には全巻贈呈いたします。
第１巻　丈翁の生い立ち
第２巻　丈翁と芸術
第３巻　丈翁と実業
第４巻　丈翁と政治
第５巻　丈翁と教育界（全巻の索引付き）

＊第１巻表紙
（高３佐藤凛さん）

学習支援センター（仮称）

新築について

１　建築物用途

・飯村丈三郎先生の記念となる資料の展示・管理

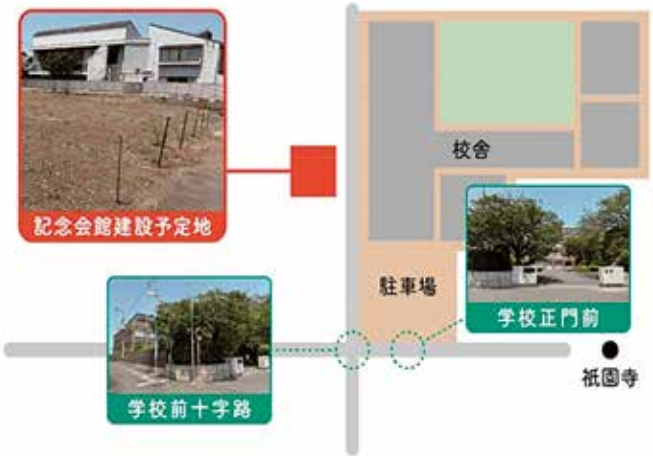
・生徒の学力向上を目的とする教育活動の実施、「学び直し」等の学習支援

２　建築物構造

・木造２階建

３　建築期間

・令和７年～令和８年



年表で見る百年（上）

１９２７（昭２）⓪金融恐慌
第１回入学式　丈翁式辞
伊藤正弘校長（初代）
中崎憲校主就任
丈翁大手町で自動車事故逝去
１９２８（昭３）①済南事件
籠球部・庭球部創部
１９２９（昭４）②「蟹工船」
談話部水中大会に出場
１９３０（昭５）③昭和恐慌
水泳部近県大会３位
柔剣道場移築　剣道部県中学
武道大会に初参加
１９３１（昭６）④満州事変
社団法人茨城中学校後援会
本多文雄第２代校長就任
１９３２（昭７）⑤５・15事件
校歌制定　寒稽古納会武道会
１９３３（昭８）⑥国際連盟脱退
野球部発足
１９３４（昭９）⑦満州国帝政
水泳部県大会総合優勝
１９３５（昭10）⑧芥川・直木賞
籠球部初の全国大会出場
１９３６（昭11）⑨２・26事件
籠球部県大会優勝
１９３７（昭12）⑩日中戦争開始
創立十周年記念式
１９３８（昭13）⑪国家総動員法
野球部県大会優勝　第１応援
歌制定　祇園寺の梅林を借用
し運動場を拡張
１９３９（昭14）⑫第２次大戦
陸上部百Ｍ関東大会優勝
野球部県大会優勝
１９４０（昭15）⑬大政翼賛会
水泳部県大会総合優勝
１９４１（昭16）⑭米英宣戦布告
毎週火曜日朝全校教練　校舎
増改築運動場拡張
１９４２（昭17）⑮翼賛選挙
飯村雄校主就任　農地開墾勤
労奉仕
１９４３（昭18）⑯修業年限短縮
飯村丈三郎第十七回忌法会
学徒勤労隊
１９４４（昭19）⑰学童集団疎開
１・２年生五百名の援農部隊
１９４５（昭20）⑱水戸大空襲
県内私学閉鎖千百五十名応募
学校工場化　空襲を免れる
１９４６（昭21）⑲日本国憲法
穴沢清次郎校主就任　授業料
倍額に値上げ
１９４７（昭22）⑳教育基本法
新制茨城中第１学年百名募集
１９４８（昭23）㉑新制高等学校
新制高校五十名　新制中学
百五十名募集
１９４９（昭24）㉒茨城大学開学
旧制中学校最後の卒業式
生徒会会則完成
１９５０（昭25）㉓県私学協会
野球部北関東大会出場
第１回文化祭
１９５１（昭26）㉔平和条約調印
竹内勇之助理事長就任
新制第１回修学旅行
１９５２（昭27）㉕日米安保条約
新校舎竣工　創立二十五周年
記念式典
１９５３（昭28）㉖テレビ放送始
折原徹校長就任
１９５４（昭29）㉗第５福竜丸事
件
高校第１回修学旅行
１９５５（昭30）㉘原水禁大会
生徒会規約改正中生徒会独立
１９５６（昭31）㉙国際連盟加盟
岩上二郎校長就任
中学吹奏楽団結成
１９５７（昭32）㉚南極観測基地
創立三十周年記念式　新校舎
１９５８（昭33）㉛東京タワー
レスリング部全国団体４位
１９５９（昭34）㉜皇太子成婚
岩上校長知事当選
１９６０（昭35）㉝新安保条約
拳闘部ライト級全国３位

あの時　昭和46年10月30日

茨城高校文化祭「放蕩祭」開催

昭和47年卒　照沼　毅（24回）

昭和46年10月30日～31日の２日間茨城高校始まって以来の破天荒な文化祭を開催した。それは「放蕩祭」と銘打った文化祭だ。先生たちの猛反対にも屈せず放蕩息子の放蕩という言葉をあえて使ったタイトルだった。

先生方の心配をよそに写真のような仮装行列を強行し、学校から大工町、泉町南町、駅前まで大通りを練り歩いてＰＲし、大きな話題となった。学校は大変だったと思う。写真にあるように、仮装行列には「放蕩祭貫徹」のプラカードを掲げている。生徒会と先生方で大変な論争をした結果、開催に漕ぎつけた文化祭だった。

当時はポスターも注目を集めた。デザインは同級生の板谷充祐君。彼は現在「ミックイタヤ」という名で東京スカイツリー「ソラマチ」の壁面装飾ほかを手掛ける著名なグラフィックデザイナーだ。数年前、高３の生徒全員が「ソラマチ」の壁面装飾を見学した。当時から才能の片鱗が垣間見えていた。

その頃すでに車を所有する同級生もいて、横断幕や、ポスターで飾り付け、車を先頭に思い〳〵の仮装で飾り付け、仮装行列をやってのけた。今考えても無謀だったと思う。当時の写真を見てもわかるように本当に派手で、盛り上がっていた。仮装はレベルが高く、特に演劇部員の女装の着物姿は絶賛を浴びた。

ヘルメットと覆面姿で旗を掲げゲバ棒を持ち、さながら学生運動を思い起こさせるグループもいた。行列の隣には心配そうな表情で随行する先生方もいらした。本当に大変だったと思う。

その甲斐もあり「放蕩祭」は大変盛り上がり、市内外の女子高生で溢れた。出し物のレベルも高く体育館で開催した「ロックコンサート」「演劇部の公演」「ミュージカル劇」は文化祭の域を超えていた。

文化祭の前、生徒会が制服自由化を唱え、実現させた。まだまだ男子校特有のバンカラな一面が残っていて、自由に行動できた時代だった。

いつもタイムスリップするようにして、この文化祭を思い出す。高校時代最大のイベントだった。３年Ｄ組の仲間は卒業以来５年ごとに「茨城放蕩会」と銘打ち同窓会を開催している。今年70歳の古希を迎える年齢になったが、これからも絆深め、同時に茨中・茨高の発展を祈念したい。

今回「あの時」の日付を、この放蕩祭開催日、「昭和46年10月30日」とさせて頂く。

あの時　平成16年9月11日

第10回東関東吹奏楽コンクール

平成17年卒　中山　佳子（56回）

先日、第29回東関東吹奏楽コンクール高校Ａ部門に出場する母校の後輩たちの勇姿を観に、新・水戸市民会館に訪れた。トップレベルの高校がひしめく激戦・東関東地区で、茨高吹奏楽部の端正で品の良い演奏は、過半を中学生が占めていることなど感じさせない堂々としたものだった。２００４年９月11日、19年前の同じ舞台で、高校３年生の私は、６年間の音楽生活を終えた。茨中、茨高で過ごした青春時代は充実したものであったが、中でも首尾一貫し心血を注いだのが、吹奏楽部とクラリネット演奏を通した音楽活動にある。

１９５６年創立、県内で初めて全国大会に出場した伝統ある吹奏楽部は、中１から高３まで当時の部員数総勢百名を超える大所帯。部室には、先輩たちが獲得した創部以来のトロフィーや楽譜がズラリと並び歴史の重みを放っていた。

吹奏楽部の１年は、団体で挑む吹奏楽コンクールの夏をピークに、年間通し演奏行事があり忙しい。特に、アンサンブルやソロコンテストなど、全ての選択制コンクールに出場していた私は、盆と正月の数日以外休んだ記憶がない。そんな生徒以上にハードな日々を30年以上も送ってこられる顧問の蒔田先生には頭が上がらない。早朝練習に加え昼休みも練習時間に充てるため「早弁」し、常に廊下を猛ダッシュし教室間を移動していた。そんな奇妙な様子を見た友人がつけたあだ名が、アルプスの如く校舎を駆け回る「ハイジ」だそうだ。努力の甲斐あって、個人の演奏力を競うソロコンテストでは、２００２年、２００４年の２カ年でアクトシティ浜松で開催された「全日本中学生・高校生管打楽器ソロコンテスト全国大会」に茨城県首位代表、関東甲信越首位代表として出場、うち１回で全国大会３位入賞を果たした。２００２年の大会では、中学部門の県代表に自身が、高校部門の県代表に同じクラリネットパートで敬愛する飛田藍先輩が選抜されるという快挙であった。

現役最後のコンクール。中央前列：中山

そして迎えた現役最後のコンクール団体戦。自由曲は「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」、幾多のソロパートの確実性を高める研鑽に励み、木管楽器のセクションリーダーとして日夜、後輩たちの指導を行った。受験生にはハードな吹奏楽部との両立は大きな不安や困難さを伴うもので、次々と辞めていく同期の仲間を見送りながら、なんとか最後までやり切った。

茨城新聞の掲載記事。飛田藍先輩（左）と中山（右）

卒業後、茨中茨高を卒業した父と同じく私も建築設計の道にすすみ、横浜国立大学大学院建築都市スクールＹ-ＧＳＡを専攻首席で修了。一級建築士として都内を拠点に、昨年に第１期が開業したバスターミナル東京八重洲や官公庁舎、複合商業施設といった建築デザイン、都心や地方の都市デザインに幅広く関わっている。

建築の道は覚えることが兎に角多く、学生時代から徹夜が当たり前といったハードワークであるが、できることが増えるたび、ますます楽しく熱量をかけられる仕事だ。ある程度の基礎的技術が蓄積し、自分の描いたものが具体的な絵や図面としてアウトプットできる感覚は至高の喜びであり、それは中高時代の音楽活動で、クラリネットを通し自由自在に表現ができた時の喜びに一致している。そして、学問と同時に音楽活動に励む茨中高の文武両道の姿勢は、今も本業の傍ら、私的時間を使い地元・茨城のまちづくり等の活動に励む多拠点活動の姿勢に結びついている。創造性の基礎体力を養う中高時代、是非在学生には、学問も課外活動もどちらも諦めず、最後まで全力でやり抜いてほしい。

「水戸まちなかにおける都市空間活用実験」
（茨城県水戸市、2021年）

設計した自邸「まちと公園を纏う家」
（東京都三鷹市、2022年）

茨高生、茨中生の熱い夏

茨城高等学校・中学校校長
梶　克　治

今年の夏は、最高気温35度超えの猛暑日があたりまえの暑い、暑い夏でしたが、私たち茨城高等学校・中学校にとっても大変に熱い夏となりました。

すでにご存じの方も多いかと存じますが、茨城高校野球部は夏の茨城県選手権大会において強豪常総学院高校を破り、55年ぶりのベスト8進出を果たしました。昨年の甲子園出場校の明秀学園日立高校とのベスト4をかけた準々決勝も1点差で敗れはしましたが、常総学院を破った力が本物であることを証明する素晴らしい試合でした。

保護者や卒業生の皆さまからたくさんのお祝いの言葉をいただく中で、私が何よりうれしく、頼もしく思ったのは、野球部の彼らがスポーツエリートではないごく普通の高校生である、ということです。特別な待遇や環境もない中で、高校生として勉学に励みながら、限られた時間の中で練習に取り組み、大きな夢に向かって挑戦していく姿は、一般の生徒たちはもちろん、私たち教職員にも大きな感動と勇気を与えてくれました。本校が弘道館から継承した文武不岐の伝統は、令和を生きる生徒たちにも確実に受け継がれていることを強く実感しました。

さて、野球部の活躍が注目されたこの夏ですが、実は本校ではこの夏、野球部以外にも、実に大勢の生徒たちが部活動やコンクールで大活躍をしてくれました。

中学弓道部は、茨城県総体で女子団体が優勝、全国大会出場を果たしました。また、男子個人戦でも中学2年生の武石龍丸君が優勝、武石君は全国大会でも4位入賞に輝いています。

水戸市平和作文コンクールでは、中学2年生の藤沼里彩さんが最優秀賞、中学1年生の髙柳ひかりさんが優勝賞に選ばれ、二人は水戸市平和大使として広島原爆の日に広島平和記念式典に参列しました。

将棋部は、8月3日、4日に鹿児島県で行われた全国高校総合文化祭で茨城県代表として男子団体戦に臨み、予選を勝ち上がり決勝トーナメントでも1勝をあげ、全国5位入賞の快挙を成し遂げました。

ＪＲＣ部の高校2年生、清水心花さんは、赤十字リーダーシップトレーニングに参加した40名の中から茨城県代表に選出され、11月に東京で行われるJRC/RCY International Meeting “Tokyo 2023”に参加します。

水泳部の高校1年生、塚本健斗君は、9月に行われる鹿児島国体で水泳4×100メートル自由形リレーに茨城県代表として出場することになりました。

8月22日に行われた英語プレゼンテーションフォーラム2023茨城県大会A部門で、高校3年生5名からなる茨城高校チームは、県内の進学校のほとんどが参加する中、並み居る強豪校を抑えて第1位、茨城県知事賞を獲得しました。

そして、8月9日に行われた茨城県吹奏楽コンクール高校生A部門に、吹奏楽部の中学2年生から高校3年生までの49名が臨み、金賞に入賞、2年ぶりの東関東吹奏楽コンクールへの出場を果たしました。

コロナによる行動制限が解除され、コロナ禍前の日常が戻りつつある中、茨中茨高の生徒たちは互いの活躍に刺激を受け、また与えながら、生き生きと実りある日々を過ごしています。

第百五回全国高校野球茨城県大会（夏の大会）ベスト８

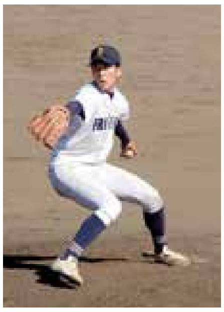
高校3年　野球部
佐藤由宇（ピッチャー）

まずは、私たち野球部へのたくさんの応援、本当にありがとうございました。

春季関東高校野球茨城県大会で、野球部として61年ぶりの1勝を飾ったものの、3回戦では過去に対戦し、勝利を収めているチームに敗北を喫するという悔しい結果に終わり、それから、チームとして細かい課題を潰し、個人では大会前の最後の練習までそれぞれの個の能力の向上に努めてきました。

初戦の鹿島高校戦では、代打として出場した3年生全員がヒットを放つなど、控え選手の活躍も光り、粘り強い相手を振り切り、3回戦へと駒を進めました。

葵陵高校とはそれまでの試合では全敗という成績で、守備もリズムが生まれずエラーを重ね、追われ続ける展開となりましたが、後半になるにつれてチームもテンポを掴み、アウトを積み重ねピンチを凌ぎ前半の大量リードを守り切って第1シードへの挑戦権を獲得しました。



次の相手は春の茨城県優勝・関東大会ベスト4の常総学院高校。秋の大会でも対戦し、敗北している相手です。初回冨田の長打から先制、5回終了までに4点差をつけてリードします。しかし、相手は強豪校です。終盤になるにつれて、少しずつ縮まる点差に焦る気持ちもありましたが、徐々に増える応援の声に励まされ、いつも通りの投球でピンチを抑え、55年ぶりの夏ベスト8を決めました。

準々決勝の昨年の優勝校明秀日立戦では観客もほぼ満員という最高の状況で試合をすることができました。初回に荻原、冨田の連打、小林のスクイズで先制、その後は離しては追いつかれる展開で6回2点差をつけられ、1点を返すも反撃はここで終わり、私たちのいつもより長い夏が幕を閉じました。

この大会を通じて、何かの目標に向かってやるべきことを明確にし、自分自身の長所や短所を確認して、長所を活かし、短所を補うことで理想としている自分へ近づく事ができるということを学びました。

大会中、勝ち上がるほどにたくさんの声援をいただき、その声援のおかげでここまで勝ち進んでこられました。コンクール目前に暑い中毎日来てくださった吹奏楽部、朝や昼休みや放課後を使って準備、練習をして素晴らしい応援をしてくださった応援団、チア、サポートの方々、大声で盛り上げてくれた生徒や先生方やOB、OGの皆様など、感謝してもしきれません。皆様、最高の夏を本当にありがとうございました。

「4回戦はやはり常総学院―茨城だろう。百戦練磨の常総学院に茨城のエース佐藤由が自分の持ち味をフルに生かし切った。／準々決勝も茨城の頑張りが光った。明秀日立との一戦は佐藤由の球数がかさみながらも、センスと投球術で投げ切った印象がある」―県高野連審判部長・後藤賢氏の総評だ。準々決勝ベスト8で敗退したが、今年の茨城は鮮烈な印象を残した。

佐藤君の手記を補足する。シードで2回戦からの登場、佐藤由は7回まで「ノーノー」のチャンスがあった。8回先頭打者に左前打されたが8回無失点の好投だった。

3回戦は初回小林悠の右犠飛で先制、3回1死3塁から冨田、佐藤由、小林悠の連続安打などで4点を加えた。葵陵は中盤に5点を加え追い縋った。7回無死1・2塁で左翼佐藤洋太のダイビングキャッチがあり、9回裏2死満塁代打のピンチも粕谷・佐藤由のバッテリーが3球三振で締め括った。

4回戦も冨田の3塁打、佐藤由の適打で先制した。佐藤由は130㌔台の内角攻めに80㌔台のカーブを交え緩急のリズムを作った。本校に秋の大会で苦戦した常総は対策を練ってきた。三者凡退に抑えたのは3回だけでピンチのたびに捕手粕谷はマウンドに行き佐藤に声をかけた。直球を狙ってくる好打者に対し今回効果を発揮したのは真ん中から小さく変化するカットボールだった。大舞台に野手は「野球をやっているようじゃなかった」らしい。古い感覚で言えば失策が4つもあったら勝てない。それを15残塁の粘投で打ち勝ってしまった。岡部監督の積極野球がよく出た試合だ。

準々決勝の前に佐藤由は岡部監督に「僕の体力は残り5％です」と冗談混じりで言っていたらしい。3回からは尻と腿がつり始めた。以後6回までに5失点し逆転された。茨城は計7安打4得点と追い縋ったが勝てなかった。佐藤は4試合で524球を投げ最後まで崩れなかった。（K）

飯村丈三郎と教育③

平成30年飯村丈三郎研究会と茨城地方史研究会の調査により、飯村丈三郎の大正7年から10年の4カ年分の日記が確認され、令和3年、久信田喜一氏の手に拠って翻刻された。本年の茨城地方研究会機関誌『茨城史林』第47号以後順次公開される予定だ。日記に記された飯村と教育の関係を書き出してみる。①教育誌『茨城青年』の運営（編集者・田沼富三郎の支援、田沼没後第2期の編集を『いはらき』新聞政治部・高谷祐次に担当させる件他）、②「茨城育才会」の起動と組織化、これに関連し③水戸高等学校の設立相談と文部省への校長候補推薦（菊池謙二郎を推薦・不調）、④下妻の私立絅文女学校の町立高等女学校化支援、⑤立見四郎と水戸幼稚園の支援及び廃園、⑥教科書調査、などがある（いくつかは後に詳述）。

以上のように飯村は当初国や地方が進める公立の教育の支援に終始している。私立学校設立に至る心情を知るにはまず飯村自身が受けた「教育」を知らねばならない。

飯村は、彼が成した「もの」や「こと」で説明される傾向が強い。「もの」とは、例えば銀行、新聞社、保険会社、それから鉄道、石材会社、精米会社、学校など近代的なインフラや法人のことだ。「こと」とは、例えば日本美術院、いはらき新聞内文壇「木星会」、石州流「何陋会」、雨引観音や六地蔵寺の調査など、文化事業の支援になる。そういう「もの」を作り「こと」を成した「ひと」（＝偉人）が飯村だということだ。ではさらにその「ひと」を作ったのは何か。それは「教育」だ。飯村はそれを「恩」という言葉で表現している。

儒教の方では第一が父母の恩、第二が主君の恩、第三が教師の恩、これを人間の三尊と称しているが、我が仏法の方ではまた夫れよりも一段深いところの『衆生の恩』ということを加へて、四恩と称して居る。

飯村丈三郎が幼い頃、亮天僧正から受けたいわゆる「四恩の説」だ。「村の庄屋さんになるならば、何も稽古せずとも宜しい。何か少しやると生意気になって、人が莫迦に見えたり何かするから、何も習わないで宜しいが、ただ一つ貴様に教えることがある。『恩を知れ』ということである」そう前置きがある。本校建学の精神「報恩感謝」の原点、「衆生の恩」について亮天僧正はさらに次のように言う。

実を言へば、小作人から見れば地主は恩人、地主から見れば小作人は恩人で、これが所謂社会相互の恩といふものであつて、その点をよく思はなくてはならない。人間社会の上下を一言にして『駕籠に乗る人、舁ぐ人』といふ語があるが、これも気を付けて考へれば、駕籠に乗る人は銭を出して体を休ませて貰ふので、舁ぐ人は恩人、舁く人は体を労して賃銭を貰ひ、その賃銭で女房子供の生活を続ける。即ち駕籠に乗る人から見れば、舁ぐ人は恩人、舁ぐ人から見れば駕籠に乗る人が恩人で、恩と恩の交換に過ぎない。然るに駕籠の乗る人が銭を出すからといふて、威張つて駕籠を舁ぐ人が『へいへい』とあやまつて居るといふ訳のあるものぢやない。これを以て社会相互の恩といふことが解る。人生の事に上だ下だといふ階級的思想を持つては宜しくない。（『四恩の説』）

飯村はこの世の姿を「恩の交換」と見ている。これは「哲学のノーベル賞」を目指して開設された、アメリカの「バーグルエン賞」をこの度受賞した柄谷行人『力と交換様式』の、「交換様式」によってこの世を捉える思想に通じている。違うのは柄谷が交換様式Cと押える商品交換の背後にも実は交換様式AやDに見られる「贈与と返礼」的な「互酬」関係が「報恩感謝」として存在する、と見る点だ。

飯村が実際に受けた「四恩」の内実は飯村の次のような著述に、一層具体的に書かれている。

父母の恩…『父母の巻』
　…父母から受けた庄屋の経営学
主君の恩…『飯田軍蔵伝　尽忠護国塔』…水戸学
教師の恩…『家庭小話』
　「心の学問をせよ」
　…菊池三溪他から受けた儒学
衆生の恩…『四恩の説』
　…亮天僧正から受けた仏教

次回はこれらを紹介したい。（K）

会報編集
加倉井東他　校内百周年準備委員会